

「言葉」が幼児理解の 壁になるとき

入江 礼子

「おしっこ！」

やっとこさつとトイレでオシッコができるようになった幼い子どもの母親や保育者は、この言葉を耳にすると、とるものもとりにあえず、「それっ！」とばかりに子どもを小脇に抱えてトイレに飛び込む。「ジャーッ」と勢いよく出るオシッコを見るとほっと一安心。「やれやれ、この子どもだんだん人間らしくなってきたかな」と一人つぶやく。

こういうことは、子どもと共に生活をした人なら一度ならず出会う場面であろう。私たち大人にとつて、「オシッコ」「ウンコ」という排泄に関する言葉は、特別な響きをもって耳に届く。子ども自身、がうまく自分の排泄をコントロールしたとき、大人はなんだか子どもたちが人間としての自立に向けて、着実な一歩を踏み出したように思い、安心感とも嬉しさとも言えぬ気持ちに包まれる。

このことは、確かに真実の一面を持っている。ところが、ここに意外な落とし穴があるのだ。

〈エピソード〉

愛育養護学校家庭指導グループ。ここにB君という九歳になる男の子がいる。普段は普通学級に通いながら水曜日と土曜日だけグループに通ってくる。

B君が「オヒッコ」と言ってオシッコを教えてくれるようになったのは、ここ一年半のこと。お母さんも保育者も嬉しくて嬉しくて、B君が「オヒッコ」と言うたびにいそいそとトイレに連れて行く。

それが、ここ二、三か月どうも様子が違う。身をおしっこに行きたそうにして「オヒッコ」と私たちを呼ぶ。「まあ、おしっこなのね。じゃ、トイレに行きましょう」と、私たちは何の疑いもなくトイレに直行しようと思うのだが、当のB君がトイレとは反対の方向に歩き出してしまふ。

「あれっ？ おかしい。あんなにトイレに行きたそうにしているのに、行かないなんて。行きたいのは間違いないのだから、ともかくトイレに連れて行くこ

う。行きたいんでしょ。漏れないうちにトイレに行こうね」と声をかけ、手をつないでトイレに向かった歩き始める。最初の二、三步はよかった。でもまた反対の方に行ってしまう。相変わらず、体はオシッコに行きたいようというようによじれている。こんなことを二〇分くらい繰り返した。

「せっかく、おしっこがトイレでできるようになったのに、このままB君のあとをついてばかりいては、おしっこが漏れてしまう。せっかくできるようになったおしっこ、グループで漏らしたと聞いては、B君のお母さん、がっかりされるだろうな」、こんな思いが一瞬私の胸をよぎった。

「やっぱり、でちゃうといやでしょ。トイレに行くわよ」、とB君に声をかけ、ついに私はひきずるようになりトイレに連れて行った。パンツを下ろした瞬間、出るわ出るわ。やっぱりオシッコだったのだ。けれど、ほっとしたのは私だけ。B君はオシッコを終えると、何事もなかったかのようにトイレを後

にした。その日、私とB君の関係はそこで切れた。

この日、私は落ち込んだ。「B君がトイレに行きたいことには間違いなかった。『オヒッコ』と言って知らせてくれたのも事実。でも何かが違う」この思いはしばらくの間、私の心から離れなかった。B君はいつたい私に何を言いたかったのだろう。

無意識のなかに潜む「生活習慣の自立」という視点

私たち大人は、意識しているにいかかわらず、幼い子どもたちが「オシッコ」や「ウンコ」を言葉で教えてくれ始めるかなり以前から、子どもたちの体のリズムを見計らってトイレに連れて行く。出なくて当たり前なので、出れば思わず「上手にできたわねえ」と歓声をあげ、思いっきりほめる。初めのうちはぎよんとしていた子どもたちも、やがて母親や保育者の満面の笑顔を見て、にこにこ顔にかわる。

こういうことを続けるうちに、ついに子どもが「おしっこー」と言える日がやってくる。「とうとうやった！」と大人たちは、エピソードのなかの私のように、いそいそと、ときには、絶対の意思を持ってトイレに連れて行く。子どもによっては、これでトイレに関する是一件落着となる。この場合は大人の側にこのことに対する意識の変革をせまられるような事態は起こらない。私の場合、三人の子どもを育てているときは、このことをあまり真剣に悩まずにきた。何日間か、床やじゅうたんを汚す覚悟でおむつをはずしてきた。すると必ず子どもたちは、おむつをはずすとほとぼしり出る自分のオシッコの存在に気づく。やがてそれがオシッコという言葉と結びつく（なにしろ、それまでに、その言葉は、母親の口から幾度となくでているのであるから）。こうなれば、あとは習慣化していき、やがては、自分でトイレに行かれるようになる。生活習慣の自立を一つ遂げたことになる。それも生活習慣の

自立などと意識的に考えるまでもなく無意識のうち
に……。

私の記憶の中にも、また、当時ぼちぼちとつけて
いた育児記録にも、そのことで困ったことは記され
ていない。ひょっとすると、抱き上げてトイレに連
れて行くときなど、嫌がったことがあったのかもしれない。
けれどもその当時の子どもたちの体重は、
ともかく軽かった。わたしの体力でも十分に楽々と
トイレに連れて行かれたのである。だから、私は子
どもたちがたとえささやかな抵抗をしめしてい
ても、それに気がつかなかったのだろう。

発達のゆっくりなB君の場合

B君はいま九歳。小柄とはいえず、幼児特有の柔ら
かいぼよぼよとした感じはなく、ぎゅっとしまっ
ている。グループに通ってきているほかの幼児よりも
ずっと体重もある。

B君が本格的に週二回グループに通い始めたのは

三年前。当時のB君の足元はおぼつかなく、段差の
あるところで、必ずといってよいほどつまづいて転
んでいた。目線がいつも上加減ということもあっ
て、なかなか足元を見ることができなかった。いま
でもその傾向は残っているが、場所にも慣れたこと
と、足がしっかりしてきたこともあって、あまり転
ばなくなった。お母さんによると、B君は生まれた
ときからとても弱く、よく吐いたり、血を吐いたり
したこともあったため、ともかく命を守ることに全
身全霊を傾けたという。そのB君が歩けるように
なったのは、グループに来る少し前のことで、五歳
のときだった。お母さんはひとときたりとも目を離
すことは出来なかったという。

おしっこを教えるB君

グループに通うようになったB君は、その年の夏
前にグループでもおむつをはずしてパンツで過ごす
ことにした。家ではパンツで過ごしており、時間を

見計らってトイレに連れて行っているというお母さんの話を聞いて、グループでも同じようにパンツになったのである。十時に登園してくるので、十一時頃にトイレに連れて行くことになる。連れて行くこと、たいていは出た。ときには、間に合わないこともあったがそれも普通のことであり、順調というのが私たちグループの保育者の感想だった。

やがて、九月になると、B君の大好きな男性保育者にはじめて「オヒッコ」と言って教えた。そのことをお母さんに伝えると、家でも教えることがあるという。

時は経って、次の年の五月のこと。家では、おだてると、トイレに行くという。そのあとすぐに、グループでも一緒に遊んでいる、比較的B君に親しい保育者に「オヒッコ」と教えるようになった。

ところが、六月になると、「オヒッコ」と教えてくられて、すぐには行くこうとしないということが起こる。当時の記録を見ると、「トイレは教えるが、

行くこうとしない。保育者が引きずるように連れて行くこうとすると、それが遊びになり、そうこうしているうちにトイレをする」とある。

その後、このことに関する記録はあまりなくなる。

再び「おしっこ」の記録が増える

おしっこを「オヒッコ」という、はっきりとした言葉で私たち保育者に教えてくれるようになってから、約一年が過ぎた。その頃から、またB君のオシッコに関する記録が多くなる。

〈エピソード2〉

(1) 「オヒッコ」と言うが、それまで一緒に遊んでいた女性の実習生とは行かずに、男性の保育者と行く（好きな保育者と行きたい）。

(2) 「オヒッコ」と言うので、そのとき遊んでいたB君の大好きな男性保育者と一緒にトイレの方に行くが、トイレには行かない。その保育者がそれまで

B君とやっていた「おでかけごっこ」に使っていた荷物を下ろすと、「いっえあっあーい（いってらっしゃーい）」と言って、その荷物をもって出かける遊びをするように働きかける。実習生が「もう、おしっこ行かないの？」と聞くと、すーっと自分からトイレに入っていく（オシッコには行きたいが、まだ遊びを続けていたい。オシッコに行きたかったことを思い出せば、自分からトイレに入る）。

(3)「オヒッコ」と言ってから二時間も行かないであちこち遊びに行ってしまう。どうやら、このときは、オシッコに行きたいというより、遊んでくれという合図に使ったようだ（人を呼ぶために言う）。

(4)とてもオシッコに行きたそうにするのに連れて行くとうとう嫌がる。とうとう我慢ができなくなって漏れてしまった（連れて行かれること自体を嫌がる）。

そしてこのあと、エピソード1の記録へとつな

がっていく。記録のなかにオシッコのことが増えたのは、B君と一緒に遊んだ保育者が、「トイレに行きたそうにしているのに、何十分も行かないB君」に、なにかわからないものを感じたからであろう。

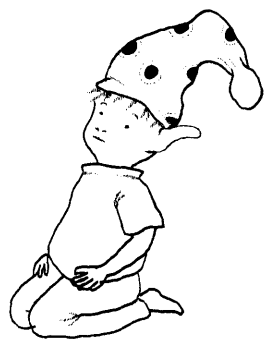
まえにも述べたように、「オシッコ」という言葉は、母親や保育者にとってもインパクトの強い言葉だ。私たち大人は「オシッコ」と聞いただけで、もう子どもをトイレに連れて行くことしか頭になくなる。トイレで「オシッコ」をさせるのが大人の役割と、何の疑いもなく決めてかかる。まして子ども本人が「オシッコ」と言葉で表現しているのだから、なおさら疑いの余地がない。

このことを子どもの立場から考えてみると、「オシッコ」と言いさえすれば、必ず大人が飛んでくるということになる。B君もそれを知っていて、例えばエピソード2の(3)のように自分が大人と一緒に遊びたいときにこの言葉を使うことがある。大人にとっては「オシッコ」は「オシッコ」以外のものを

意味しない。けれども、言葉が発達途上にあるB君にとっては、もっと含みのある言葉なのかもしれない。このことを確かめるために当時のB君の言葉の発達の様子を見てみよう。

B君の言葉

「オヒッコ」というB君の言葉、実はとても特徴があった。グループに通い始めの頃、私たち保育者には「アアア」としか聞こえない言葉も、お母さんには全部了解可能で、「あつ、いまはおはようと一言ったんです」とか、「バスね」とか「カローラね」という具合だった。よく耳を済まして聞くと、イントネーションが「おはよう」そっくりだったり「バス」そっくりだったりする。「なるほど、お母さんはこのイントネーションで全て分かるのだ」と納得した。B君と遊ぶ回数が増えるにしたがって、私たちもお母さんとまではいなくても、大分B君の言うことが分かってきた。言葉で通じるというのはB



君にとっても、私たちにとっても嬉しいことだった。何回も「アアア」といった挙句にやっと私たちに通じたとき、B君は笑顔で一杯の顔になる。その笑顔を見て、私たちもまた笑う。笑いあうことでその場を共有できたと思うことがよくあった。

歌も大好きで、童謡、民謡などをとても確かな音程で歌う（すべてアアアの発音であるが）。そして、保育者の前に来るとは「アアア」と歌いだす。保育者によって、また場合によって、口ずさむ歌が違

う。私たちがあとに続いて歌うと、しばらくそれを聞き、歌の最後の部分をすっかり一緒に合唱して歌い終わる。

「オヒッコ」と言えるようになった時期には、言葉にとっても抑揚がつき、そのうえひとつひとつの発音がアアアだけでなく、もっと本物の発音に近い音を出せるようになっていた。よく一緒に遊ぶ保育者だけでなく、新しく入った実習生にも聞き取ることが容易になってきた時期でもある。

また、単語の量は飛躍的にふえ、上手に発音できる母音を駆使しながら、いっぱいおしゃべりする。ここにそのいくつかを並べて見る（主に母音を使って発音していたのだが、ここでは、彼が言い表していた言葉そのものを表記する）。おはよう、お母さん、先生（親しい先生にはフルネームで呼びかける）、牛乳、おじさん、広尾、行きたい、食べた、おいしい、Mちゃん、おまわりさん、……。

私たち保育者にもかなりB君の言っていることが

理解でき、言葉で通じることの嬉しさを経験することが多くなった時期である。

言葉が理解の壁になる

こんなに通じることが多くなってきた時期に、エピソード1のことが起こった。

問題は、ただ人を呼ぶためにだけ「オヒッコ」と言ったのでもなさそうであるということだ。本当に行きたそうに体をよじっているにもかかわらず、大人にトイレに連れて行かれることは、頑なに、まるで石のように拒否している。そして最後に私に「ずり」と引っぱって連れて行かれて済ませたあとは、もう私の方を見向きもしなかった。ひっかかるのはこのことだ。

「オヒッコ」と言われて、私かどのように思っているのかは、エピソード1のところでも述べた。でもこのとき、私はB君自身が本当はなにを伝えたくて「オヒッコ」と言ったのか、実は分かっていたのか

たのではないか。私は「オシッコ」という言葉の持つ常識的な意味に縛りつけられてしまった。その結果、逆にその言葉が壁となつて、B君と私の前に立ちほだかつてしまった。「オシッコ」は出たけれど、B君は私から去つて行つたのであるから……。

B君の話せる言葉が多くなつてきたときに、このエピソード1が起つたことには、とても深い意味があるように思う。私たちは言葉を使ってコミュニケーションを図っている。私自身もB君の言葉の多さにどこか安心して、言葉だけに目を向けてつきあつてしまつたように思う。母音の多かつた彼の言葉が、だんだんと子音まじりの本当の音に近い音が発音できるようになることに、注意の大半がいつてしまつたのだ。

そこで彼が「オヒッコ」と言つても、トイレに行くといふことしか頭に浮かばなくなつてしまつた。本当は、「いま、オシッコに行きたいけれども、大人の言うとおりに素直にトイレに行くなんて、いや

だ。いつまでも大人の手のひらのうちで遊んでいる僕じゃないんだ」ということだったのかもしれない。その自立の気持ちに気づいていたら、もう少し違う関係を結べたように思う。

「オシッコ」のことは、いつも躰の面からばかり取り上げて考えられがちである。子どものたどたどした言葉もしかり。なまじ言葉をしゃべれるようになったばかりに、自分の気持ちが大人に伝わらないという体験を持つ幼児がいつぱいいるのではないか。先に落し穴といつたのはこのことである。幼児どもたちがいまある、その気持ちを無視されて、トイレに連れて行かれることが度重なるとしたら、トイレの躰は完成しても、心をくみとる力は育たないのではないか。B君との関わりを通してそんなことを深く考えさせられた。

(母子愛育会 家庭指導グループ)